

# ◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

108

長岡京期の水田利用の一例  
〜 神足三丁目での調査から〜

長岡京跡の調査では、当時の水利用がどのようなものであったのか、わかる場合があります。それは、井戸であったり、溝であったり、それに付随して設けられた施設であったりします。

今年9月に、神足三丁目で、東西幅4m、南北長さ33mの発掘調査をしました。調査地は、長岡京跡の右京七条二坊七町と呼んでいる宅地に推定されている部分です。ここでは、南部に掘立柱建物、北部に東西方向に平行する2本の溝などがありました(写真左)。北側の溝の北辺には、石組みによる護岸が施されていました。立派な石組みの長岡宮域外での検出は、非常にまれです。

今回見つかった遺構中で、2本の溝に付随して掘られた窪みと、その中から見つかった杭列群や石敷きが、水利用に関わるものではないかと考えられます(右下写真)。きれいな水が写真の手前に見える東西溝で西から導水され、右下に見える杭で囲まれた石敷き部分に溜められ、余り水などは北に流し、しがらみで浄化して、北の溝に排水される構造ではないかと思われまます。しがらみの設けられた杭列は、北側の溝が増水時に、逆流を防ぐ機能もあったろうと考えられます。

都人がここで水を汲み、洗い場としていたのでしょうか。



▲ 洗い場遺構 (南から)

◀ 長岡京期の遺構群 (南から)

神足三丁目の調査成果写真